

稷稜陣地に猛攻撃を開始、十三日夜半までに稷稜野戦陣地はすべて突破され、各部隊は小豆山に集結して態勢を整えて戦ったが、ソ連軍との激突、苛烈な戦いに壊滅に近い状態にまでなった。

師団所属の各隊将兵の多くは壮烈な戦死、しかも、二日間の戦鬪で四人の連隊長は戦死した。

第二百七十三連隊長 瀬尾 浩大佐

牡丹江重砲兵連隊長 額野哲三大佐

第二百七十二連隊長 石川栄治大佐

野戦重砲兵第二十連隊長 松村 精大佐

第二百二十四師団長椎名正健中将は、残り少ない将兵を集め、全員玉砕の切り込み態勢を整えている時、上層軍の後退命令を受けて残存部隊をまとめるに至った。同師団は敗色濃い前戦を知りながらよく戦った。慟哭の思いである。

南方転出の第八師団も、転進途上「福嶺丸」

「永治丸」等の座礁・沈没。比島戦場に着いては、敵弾と飢餓と、マラリア等に襲われ、帰れた人は

どれ程であるか。比島方面作戦に参加した陸海軍部隊六十三万。その損害四十七万余である。もし、第八師団が綏陽に残ってソ連軍と戦ったなら、たとえ精銳を誇っていても、第二百二十四師団と同様の運命をたどったであろう。

自ら老兵という、十五人の同志は、まさに老骨に鞭打って、歩兵第三十一連隊（弘前）出身の、体験者菊池政男氏の証言と、綏陽会 穴戸次夫氏の資料をもって、本文をまとめることができた。なお、穴戸氏は過般鬼籍に入られたことを聞き、御冥福を祈る。

星澤 記

蒙疆から河南まで

東京都 川村 傳

昭和十七（一九四二）年一月八日、私が入隊す

る時の私の家族構成は父、母、姉二人、私、弟、妹の七人でした。

長女の姉は既婚で、夫が陸大騎兵科出身の中佐で支那派遣軍第十三軍（登）の参謀として出征中だったので、姉は生家に戻っていました。

父の先祖は東京出身で、第十四代目が父に当たり、不動産を受け継いで暮らしていました。

私は生来弱かったので羽仁説子の自由学園に通い、給食やデンマーク体操をやらせられたためか兵隊検査は甲種合格でした。

学校は基礎工学が好きで材料工学を好んで学びましたが、軍隊では幹候は受けませんでした。大卒は帰国してからで、四十歳過ぎてからの入学です。

昭和十七年一月八日、東京駅に集合した時の服装は国民服でした。一月十日大阪難波別院に集合、三国旅館に宿泊。ここで軍服と兵器を受領し、四種混合の予防注射を受けました。

入隊先は北支派遣騎兵第十四連隊で、初年兵受領のため中野曹長と松山軍曹が来ていました。集合人員約一千人ぐらいました。

行く場所は綏遠省の一番西方の安北（アンポク）という聞いたことの無い砂漠地帯です。一月十三日大阪出発。十四日広島着、歩いて字品に行き、輸送船「信陽丸」に乗船出港しました。十六日釜山に上陸、国民学校校庭で国防婦人会、愛国婦人会の方々から豚汁の接待を受け夜半に出発。十七日鴨緑江を渡り満州国安東に着き雪のプラットホームで体操をしました。

十九日、山海関で万里の長城の壮観に感心しました。そして翌二十日、中国綏遠省包頭（内蒙古）に着きました。ここで列車を降り、そこからはトラック輸送で約百キロ西方の安北に到着。直ちに第四中隊に配属されました。

入隊当時の直属上官は

支那派遣軍司令官 畑 俊六大将

北支那方面軍最高指揮官 岡村寧次大将

駐蒙軍司令官

甘粕重太郎中將

集團長（騎兵）

西原 一策中將

騎兵第一旅團長

森 茂樹少將

騎兵第十四連隊長

渡部富士雄大佐

第四中隊長

川辺 政三中尉

第一小隊長

橘 正喜智少尉

内務班長

松山 幸人軍曹

初年兵の出身地は東京、千葉、埼玉、神奈川

二年兵は東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨

三年兵は長野、栃木

兵舎は支那家屋、ランプ、ダルマストーブ

気温、零下三〇度

食事、麦飯（職人上がりの兵隊は陰で不平を

言っていた）

内務班は古兵と同居だったがビンタは少なかつ

た。（討伐が多かったので）

訓練は歩兵操典は使わず、マルキ操典を使って

の訓練で匍匐前進二千米ートルが目標でした。

対ソ戦闘用部隊らしい。

騎兵連隊といっても馬は少して、代わりにト

ラックが主体で、教育も自動車運転が主でした。

初年兵の大部分が当時としては珍しく運転免許所

有者が多かったのです。私も持っていました。敵

性語禁止で用語が難しく大変でした。

初年兵の兵器は最新式の三八式小銃で、照門が

丸い穴型に変わり、木部はアピトンでした。騎兵

は元々スマートでしたためか、入隊前の想像と

違って軍規もスマートなのか、反軍歌（人のいや

がる軍隊に……）等が堂々と唄われ、ジャズバン

ドが作られ演奏されていたのにはびっくりしまし

た。

一期の検閲、自動車教育も一段落して、約一年

経った昭和十七年十二月十四日は、正午を期して

編成改正になり、予想通り機動部隊になりました

（北支派遣「滝」第五三二四部隊）。

ここに戦車第三師団が誕生し、我が隊は機動歩

兵第三連隊第二大隊第五中隊第一小隊となりました

た。当時の戦車第三師団長は西原一策中將、機動

歩兵第三連隊長は加島起己大佐でした。

昭和十八年一月三十日には機動歩兵第三連隊長は吉松喜三大佐となりました。

装備は中隊に一式装甲車三輛が配備され、あとはトラックが配備されました。装甲車は七四ミリ速射砲を引っ張るためで乗員十五人（速射砲手ら）武器なし。トラックは戦車の随伴歩兵一個分隊十五人が各一輛に乗車しました。

一個中隊は三個小隊、一個小隊は三個分隊、合計百三十五人が一個中隊の人員です。一個分隊の装備は三八式歩兵銃と十一年式軽機（あとで九五式軽機（ハンドル付）に変更）、トラックは制式車にトヨタ、いすゞ、補助としてニッサンがありました。ニッサンは寒さに弱いのであとで全部南方に持っていったそうです。

機械化された部隊ですが、戦車一台にトラック四台が必要です。燃料、弾薬、修理車、歩兵輸送のトラック四台です。対ソ戦目的の部隊ですから

歩戦協同の演習が絶え間なく行われました。

部隊が駐屯していた安北は、オルドス砂漠の中にある街ですが、現地人の部落は、城壁もなく無防備で、匪賊によく襲われていました。この辺はアヘンの産地なので土匪がこれを狙っているのだそうです。

また、深夜にズドンと一発銃声がありますが、それは匪賊に対する示威行動なのでした。蒋介石の正規軍の力は辺境までは届かず、傳作義軍の配下の匪賊の紛争が絶え間なくありましたので、我が部隊も河北掃滅作戦に参加するため、東隣の山西省によく出動しました。

機動連隊の弱点は補給にありました。トラックの車種が一定でなく、色々なメーカーの車があるので、故障して修理のため部品の交換をする時に、必要な車種の部品がなく、他の車種の部品があっても使えず、整備車が来るまで夜でも車の傍らで待っていなければならぬので大変な事でした。

た。

また、ガソリンが無くなった時がありました。その時は高粱酒を使ってアルコールを採ったのが支給されましたが不純物が混じっていて困った事がありました。

また、ダイカストの燃料ポンプの代用に、牛のボーコーを何枚か重ねて使ったことがあります。故障車を放置しておくと同部隊が解体して部品を取って行くので、いつの間にか車がバラバラになってしまいますので油断なりません。

補給を無視した日本軍の作戦が敗戦を招いたとよく言われますが、全くその通りだと思います。

特に食糧の現地調達はひどかったですね。名前は調達ですが実際は略奪ですものね。軍票を渡しても価値ありませんから、戦後、戦犯問題にもなりましたが、民心の把握なんてゼロでした。

昭和十九年三月、河南作戦参加のため、安北から包頭飛行場に移動、二十八日鉄道輸送で包頭出

発、京包線で北京經由、更に京漢線で南下、四月一日に石家荘に着きました。そして十五日に石家荘を出発して十七日に黄河北岸の信南に着きましたが、それから線路を行進、十八日の雲間に見え隠れする臘月を背に受けながら宵から深夜にかけて、装甲兵車を誘導しつつ黄河鉄橋を渡りました。

四月二十日早朝、河南省霸王城附近で、敵の迫撃砲の砲火を浴びる。以後、汜水、竜門、行季村、蘇家屯、宝豊葉村、洛陽、方城、内郷、浙川を通って鄭州の硝煙の跡も生々しい戦跡に到着したのが四月二十三日でした。

五月一日、臨汝附近の戦闘中、ノースアメリカンP48型戦闘機（四機）の初空襲を受ける。竜門、洛寧を経て五月二十五日、洛陽陥落。六月十五日洛陽警備に当たる。その後、葉県西方の老鴉張に駐屯しました。

昭和二十年三月二十四日、老河口作戦に参加のため駐屯地を出発、白河を渡河して浙川に一番乗

りました。昼間は米機B25、P40、P51（ムスタング）の来襲が激しく、行動不能となり、夜間は照明弾、月明かりを利用してのP38戦闘機の来襲などで損害が続出、山中の行軍で苦勞の連続でした。

制空権の無い機甲部隊なんて惨めなもので、朝になると敵機がくるので、夜のうちに各部落に分散して置いて、軌道の跡を消しておくのです。軌道の跡が敵機の目標になって爆撃されるからです。

敵兵との戦闘が始まると、各トラックの運転手も車を一個所に集めて、留守番兵一人を置いて、他は戦車随伴歩兵として戦闘に参加するのですが、敵弾が戦車に当たり跳弾となって歩兵に当たるのでたまりませんでした。

私も老河口作戦の時は運転手を集めた重機関銃の分隊長としてテクテク山の中を歩きました。雨が降って道路が黄土でぬかるみになって、人車一

体となって悪路と戦って、一夜で、たった二キロしか進めなかった時がありました。

良かったのは河南作戦の前半期だけでした。私は従軍期間が十一年八カ月で、あと五十日あれば恩給がもらえたのです。あの頃入院していた連中は帰国が遅れて皆もらっています。

作戦は河北共產軍掃滅作戦で山西省に進出しましたが、大した戦闘でなく、常に敵に逃げられ結果なし。民衆が敵に通報していたため、山中を苦勞して行っても、常に敵がいなのです。夜、部落の外れの路上で村の鍛冶屋が火を焚いて仕事を始めるのです。仕事ですから文句を言う訳にもいかなのですが、実は仕事は仮装で、連絡用の焚火なのでした。

これも日本軍が民衆から嫌われていたからで民心の把握ができていない証拠です。

昭和二十年八月十日頃、ソ連軍が参戦したとの情報が入り、我々機動部隊は直ちに許昌（黄河の

南方)に集結を命ぜられました。そして徹夜で戦車を貨車に積込むのに無蓋車が無く、有蓋車ばかりだったので、有蓋車の箱の部分を撤去して火をつけて燃やし、その明かりで無蓋車に改造する作業をやっている最中に中隊長が「どうも戦争が終わったらしい」と言われました。

「そう言えば、敵機が来ないぞ」ということで騒いでいるうちに、無線で「軽拳妄動を慎むように」との連絡が入りました。陸士出の隊長の中隊では「国は負けても〇〇中隊は負けてはおらんぞ」と演習をやっている。我々は気落ちして「軽拳妄動を慎めと言うのだから昼寝でもするか」なんて言っていました。四年も外地にいと内地に帰るなんて考えなかったのです。

何かマッチ箱みたいな爆弾が落ちて焼野原になっちゃったとか。住民で英語のできる人からアトム爆弾のことを聞いていたものですから「えらいことになっちゃったなあ」と思っていました。

それから北京に集結しろということになり、蒙古の陣地に行くべく用意していたのが終戦になり、各地に分散していた兵隊が一斉に許昌に集結するので貨車が足りなくなりました。

仕方なく自動車輻を黄河の岸に放置しました。許昌から貨車に乗って北京に向かいました。徐州の辺りまで来たら、重慶から来たのか「韓国復興分子」と書いた旗を持った連中が肩で風切って威張っていました。

途中で困ったことは八路軍が附近の住民を使って鉄道のレールを撤去して妨害することでした。それを復旧するのですが、そのうちに今度は枕木の下に砂利を取り除いてあるのには本当に手を使きました。

中国人の労働力を見ため以上に大きいもので感心しました。万里の長城が良い見本です。すべて人力です。貧弱な道具で大きな事をやります。

八路軍は民心の把握に優れているので住民もお礼というか義理立てでしょう。

北京集結に当たって八路軍と蔣介石軍といざこざがあつて、一旦返納した武器をまたもらつて電信所なんかの警備に当たるようになりました。北京の市内も日本軍と蔣介石軍との共同警備となりました。

米軍もおりましたが、日本兵を警戒して「地下足袋はやめてくれ」「夜間の歩哨の抱え銃は荷い銃にしてくれ」など、南方戦線で、日本軍の斬り込み戦法に痛めつけられた米軍の後遺症でしよう、いろいろ注文をつけてきました。

結局、北京にいた隼戦闘機隊と私達の虎兵団は米軍に嫌われてしまいました。早く帰せと言うようになりましたので私の軍歴が十二年になります。

英語は今まで禁句でしたが、急に英語の勉強しろということになり、私は通訳になりました。

昭和二十年十一月末、塘沽から米軍のLST（戦車輸送船）に乗せられたのですが、機雷原を

避けるため南方に迂回したものですから、兵隊が心配して「ああ南方で奴隷にさせられる」と騒いでいました。

そして十二月四日に長崎県佐世保の南風崎に上陸、懐かしい我が家に約四年ぶりに帰りました。

弟は私の出征後、現役で中支の無錫に征っており、家におりませんでした。昭和二十一年四月に無事帰国しました。ほかは皆元気でした。

復員後、米軍政府に就職し、日本の物資の移動に関する米軍の許可、また物資の調達や技術顧問となり尉官クラスとも親しくなりました。そして作戦のやり方や兵隊の扱いなどで、日本とは大いに違うなあーと痛感させられました。